

私を墮とせるのはただ一人？ いや、こ
こからが恋人だし！

【第7話】

みなぎし
すい

【人物一覧表】

柊千咲：女子高生

白石彩夏：社長令嬢

神谷里見：女子高生

杉園愛梨：モデル

飯田早苗：女優

柏木奈子：千咲の叔母

前田香（30）：白石インテリジエン
ス社員

女子生徒 A

女子生徒 B

司会者：司会の女

○女子高・3の3教室（朝）

扉が開く。柊千咲、教室に入る。

千咲の視線が、白石彩夏、飯田早苗、
神谷里見、杉園愛梨のほうに向く。

千咲「え……」

千咲、髪をおろした愛梨を見る。

千咲「愛梨ちゃん、なにそれ！ めっちゃか
わいいんだけど……！」

千咲、感激の表情になり、口を手で覆
う。

愛梨「あ、あのね。イメチェンしてみたの」

千咲「なんで」

愛梨「千咲ちゃんに、褒められたから」

○（回想）杉園宅・愛梨の部屋（夕方）

千咲「これとか、清楚で似合うと思う！ お、
おろした髪型とか？」

千咲、服を1着手に取る。

（回想終わり）

○女子高・3の3教室（朝）

千咲「あーね。にしても、マジかわいいっ」

愛梨「えへへ、えへ。千咲ちゃんに褒められてうれしい」

愛梨、嬉しそうに笑う。

里見、自分の胸に手を当てる。

○同

生徒たちが昼食をとっている。

早苗、女子生徒2人に勉強を教えている。

早苗「これでいいかしら」

女子生徒A「はい！」

女子生徒B「きゃーかっこいい！ 飯田さんに勉強教えてもらっちゃった！」

女子生徒たち、うれしそうに離れる。

その様子を見ている千咲、彩夏、里見、

愛梨の4人。

早苗、千咲たちのもとへ歩いてくる。

彩夏「あいかわらず人気だね早苗」

早苗「そうね。なんでかしら」

彩夏「女子ウケするからじゃない？　明らかに女子ウケだよこれ。クールな感じがウケてるのかな？」

里見「なんか、早苗がウケてんのわかるぜ。かつこいいいな早苗。　ちよっとちげえけど、早苗見たとき昔の大好きな友達のこと思い出したし」

愛梨、里見を見て悲しそうな顔をする。

千咲「そうなの？」

里見「ああ。お前も……いや、お前は早苗とはぜんぜん似てねえな」

早苗「そうかしら？　似てるから映画出演させただけど」

里見「いや雰囲気の話だよおおえ！」

○柏木宅・寝室（夜）

千咲、スマホをいじっている。

柏木奈子、千咲の頭をなでなでする。

奈子「楽しそうね」

千咲「うんっ！ お友達4人もいるから！」

奈子「かわいい」

千咲「えへへー。もう、柏木家に養子で入っちゃおうかな？」

奈子「しんどかったら、そうしてもいいのよ」

千咲「でも…：せっかくもらった名前を捨て

たら悪いから」

奈子「優しいね」

奈子、千咲をじっと見つめる。

※ ※ ※

（フラッシュユ）

奈子、病院で息を切らしながら、3人の寝ている女の子の赤ちゃんを見る。

※ ※ ※

奈子M「でも、もう…：…」

○白石インテリジェンス前

T「数日後」

立て看板に、人間と人工知能の共同フ
ァッションショー開催の旨が書かれて

いる。

里見「ここか」

里見、建物を見上げてから中に入る。

○白石インテリアジェンス・広い会場（朝）

洋風の部屋に、カメラを構えた人など
たくさんの方がいる。

里見、椅子に座る。

彩夏「本日はお忙しい中御足労いただき、ま
ことにありがとうございます」

スーツ姿の彩夏、壇上でイベントの説
明をしていく。

壇上に、精巧な人型人工知能が様々な
ファッションで立っている。

彩夏「では、参加者の人間の方はステージま
でどうぞ」

控室への出入口から、様々なファッシ
ョンに身を包んだ男女が出てくる。そ
の中に、愛梨、早苗、千咲がいる。

千咲、肩と胸が露出している服装に身

を包んでいる。

参加者全員が、番号札を首にかけている。

千咲 M 「なんでこんなことに……」

千咲、恥ずかしそうな表情で胸元を手で隠している。

○（回想）女子高・3の3教室

5人、千咲の席の近くに集まっている。

彩夏 「ってわけで、うちでファッションショーやるの」

里見 「なんで AI 企業でファッションショーやんだよおおえ！」

彩夏 「簡単に言えば AI の性能テストだよ」

早苗 「あたしもなぜか招待されてね」

愛梨 「わたしも……」

里見 「じゃあ、あたしと千咲で見に行けばいいんだな？」

彩夏 「ううん、千咲は参加してもらおうよ。もう申請したから」

千咲「……は？」

千咲、きよとんとする。

里見「まじか。じゃあ見に行こうかな」

（回想終わり）

○白石インテリジェンス・広い会場（朝）

千咲M「彩夏のばかり！　なんで参加させたの！　こんなとこに素人招待するなあああ！　つか50番って最後じゃん！　もうー！」

彩夏、笑顔で千咲に向かって手を振る。

千咲、ドキツとする。

千咲M「彩夏かつこいい……こんなのドキドキしちゃうってば。これじゃわたしが恋してるみたい……ってそんなわけないから……！」

彩夏M「千咲かわいい……ふふ、このイベントに呼んだ甲斐があったなあ」

彩夏、ほんわかしてから、客席の方を向く。

彩夏「では、それぞれ自分のファッションについてプレゼンしてもらいます！」

千咲M「そんなの聞いてないんだけど」

彩夏「では、1番の方からどうぞ」

人工知能含めた参加者が、自分の服についてプレゼンしていく。

里見M「へえ、人工知能よくできてんな。これあらかじめ言わすこと決めてんのかな？

ひとりひとりはみじけえな」

千咲「15番の方、どうぞ」

15番の早苗、前に出る。

早苗「これは、最近撮影した映画で着たものです。ちなみにわたしは主人公役です」

きりつとした雰囲気の中、早苗のプレゼンが終わる。

彩夏「33番の方、どうぞ」

33番の愛梨、前に出る。

千咲M「わたしが褒めたやつだ」

愛梨「これは、モデルの仕事で着てたものです。友達に褒められて、お気に入りなんで

す」

にここにこした愛梨のプレゼンが終わる。

千咲の隣の人のプレゼンが終わる。

彩夏「では、ついに最後！ 50番の方どう

ぞ！」

少し大きくなった彩夏の声。

千咲M「わたしの時だけ盛り上げるなあ！」

千咲、前に出る。

千咲「あ、あ、えっと……」

彩夏M「わたしが選んだ肩出しスタイル……

エロすぎ、かわいすぎ、まぶしすぎ」

千咲「あ、あ」

彩夏M「緊張してるね」

彩夏「最後だし、ゆーっくりでいいからね」

彩夏、千咲の肩に触れる。

千咲M「無理無理無理無理！ こ、こんな、

たぶんみんなの中でいちばん露出してるや

つ着ながらとか！」

千咲「あ、この服、かわいいです……」

千咲M「そんなわけねええええ！ エロいし

かないよ！」

千咲、涙目。

彩夏「それでは、最後を飾ってくれた50番の女の子に、惜しみない拍手を送ってください！」

千咲M「ちょ、まだ下がってないんですけど！」

観客A「うおおおお！」

観客B「いいよー！」

観客C「かわいいー！」

様々な褒めが千咲に浴びせられる。

千咲、小走りで後ろの列に戻る。

○同・食堂

会場と同じ構造の広い部屋。さきほどの参加者や観客がバイキング料理を食べている。

千咲「もう無理脱ぎたい脱ぎたい脱ぎたい」

千咲、部屋の端で縮こまっている。

彩夏「ほら、せっかくの豪華バイキングなん

だし、いっぱい食べて！ ランキング5位の50番さん」

千咲「立てないよお……」

彩夏「立てー！」

彩夏、千咲を立たせる。

彩夏「せっかくがんばったんだから。あの中で5位ってすごいよ？ 食べて。ほら、一緒にいてあげるから」

千咲「わかったよお」

千咲、立ち上がる。

5人組、集まる。

里見「千咲、なんつうか、すげえ服だな。直視できねえ」

愛梨「でも、かわいいよ」

早苗「さすがエロさだけは一級品ね、千咲。

映画にキャスティングして正解だったわ」

千咲「エロくない！」

彩夏「えい」

彩夏、千咲の胸を揉む。

千咲「ひうんっ！ あ、あ、あんっ、無理い

っ、そ、そこ……そこは触るなあっ！」

彩夏の指が千咲の胸の突起に触れる。

千咲「い、あっ……イクっ！」

千咲、ピクンと震える。

彩夏M、里見M、愛梨M「エロい……」

早苗「そんなに喘いで言い訳する気？」

千咲「も、もう！ 彩夏！ほんとに怒るよ？」

千咲、頬をふくらませる。

彩夏「はい」

彩夏、千咲の胸から手を離す。

5人、料理を食べている。

千咲「おいひい……来てよかったあ」

千咲、肉を食べている。

彩夏「肉好き？」

千咲、食器を机に置き、

千咲「好き！ やっぱ、昼は焼肉っしょおお

おお！」

思いっきり体をそらす。服がずれ、胸が丸見えになる。

彩夏「あっ」

4人、千咲を隠す。

千咲、服を直して立ち上がる。

千咲「あつぶなあ……」

彩夏「もうちよつとエロい千咲見てたかった」

千咲「何言ってるんだこの！」

千咲、彩夏の頬をつねる。

彩夏「いたたたた」

○大通り

5人、歩いている。

彩夏「楽しかった？」

千咲「彩夏のせいで恥ずかしかった！」

千咲、ほっぺをふくらませる。

彩夏、頬を赤らめる。

早苗「焼肉は夜じゃなかったかしら？」

千咲「え、早苗ちゃん知ってるの？ 意外」

早苗「ええ、子供のころから見てたから」

千咲、早苗に歩み寄ってくつつく。

千咲「早苗ちゃん！ 女神っ！」

早苗「な、何よ。近いわ」

千咲「友達だしいいでしょ？」

早苗「はあ……好きにすれば」

千咲「わあい！」

千咲、とびっきりの笑顔になる。

千咲「ところで彩夏、会社継がないんじゃないか
かったっけ？」

彩夏「ああ、まだ社長になる時期じゃないか
ら保留中」

千咲「保留、か」

千咲M「いつかわたしも、彩夏の思いにも答
えを出さなきゃいけないんだなあ」

○女子高・3の3教室（朝）

千咲N「そして、夏休み直前」

千咲、教室に入る。

彩夏「あ、千咲！ いま、夏休みの旅行先ど
うするか話してたの！ 海山で2対2なん
だけど」

千咲、自分の席に座る。

千咲「両方は？」

彩夏「いやー、みんなの事情を合わせるとな
んか無理でさ」

千咲「ふーん。みんなどっち？」

早苗「山ね、落ち着けるから。勉強はかど
り
そう」

早苗、きりつとした表情。

彩夏「海！ 千咲のエロい水着見たい！」

彩夏、千咲の胸を見ている。

里見「山だ！ 早苗と似たようなもんだ。あ
と、友達が好きだったから！」

里見、明るい表情。

愛梨「……」

千咲「ガリ勉が約2名と変態が約1名……愛
梨ちゃんは？」

千咲、愛梨を見る。愛梨、沈黙。

千咲「どしたの？」

彩夏「愛梨ちゃん海だって」

千咲「へえ」

千咲、はっとする。

千咲「海！ 海行きたい！」

彩夏「そっか。じゃあ、海にけってーい！」

彩夏、手を挙げる。

早苗「彩夏をひいきしたわね。まあ、彩夏の

希望どおりもまた一興ね」

里見「あーちつくしよ！ 海だったか！ で

もま、海も楽しいよな！ みんなでいける

のが楽しみだ！」

千咲「愛梨ちゃん、海だよ」

愛梨「……うん」

愛梨、力なくうなずく。

○体育館周辺

千咲、自販機でメロンソーダを買い、

飲んでいる最中。

愛梨「千咲ちゃん」

千咲「お、やつほー。何か買うの？ よかつ

たらおごるよ？」

愛梨「同じの……」

千咲、メロンソーダを買う。

千咲「はい」

千咲、メロンソーダを愛梨に渡す。

愛梨、飲み始める。

愛梨「さっきのつてさ」

千咲「うん？」

愛梨「気遣ったの？　ほんとうは山行きたかったとか」

千咲「え？　別にほんとうに海行きたかったんだけど」

愛梨「そう、なんだ。里見ちゃんは、山行きたがってたから、わたしも、山のほうがよかったのに……怖い。山に行きたいって思ったんだけど、体が、震えちゃって……」

愛梨、泣き出す。

千咲M「よけいなことしちゃったかな……山を希望したほうが」

愛梨「山に行くと、わたしに生きる価値がないって思っちゃうの……」

千咲M「ううん、やっぱり、山は愛梨ちゃん

にとって酷だ。気持ちの整理がつくまでは。

それに、海に行きたかったのは本当だから」

千咲「ああ、気にしないで。学校来るの遅れたせいで、実質わたしの独断で決まっていたから。ほら、そろそろいいこっか」

千咲、歩き出そうとする。

愛梨、下を向きながら、千咲の制服のすそあたりをつまむ。千咲、止まる。

愛梨「あ、ごめん……もう少し、このままで、いさせて……」

千咲、悲しみを含んだ笑顔になる。

千咲「いいよ」

愛梨「う……ううっ……」

千咲、愛梨を優しく抱きしめる。

千咲「だいじょうぶ、みんなで海行って楽しもうね。愛梨ちゃんも、いーっぱい、楽しんでいいんだから」

千咲、愛梨の頭をなでる。

愛梨「ぢさぎぢやああん……」

その様子を少し遠くから眺める里見。

里見「（小声で）ちっ。山がよかったんなら
山選べよおおえ！」

里見、頭をかきながらその場を去る。

里見「別に海でもいいけどよ……」

歩く里見の背中を見つめる千咲。

○白石インテリジェンス前（朝）

荷物を持った5人、バスの前に集まっ
ている。

千咲N「そして、夏休み」

千咲「すっごー！ 最新A Iが搭載されたこ
のバス乗れるの！」

彩夏「うん」

里見「貸し切りなんて、すげえな」

早苗「さすが彩夏ね。ファッションショーで
使われたA Iが、どこかに搭載でもされて
いるのかしら？」

彩夏「まあね」

千咲「彩夏すごいね！ ほら、みんな行こ！」

千咲、彩夏に笑顔を向け、バスに入る。

彩夏、ドキッとして頬を赤らめる。

早苗「恐ろしいわねこの悪魔……無邪気に笑顔
顔をふりまいて優しくおきながら、内心破
廉恥なことばかり考えている。優しさが本
心だとしても、恐ろしいわ」

里見「そんな悪魔言われるほどエロかねえだ
ろ」

早苗「里見が知らないだけよ」

里見、自分の胸元を見て、

里見M「またこのちくつとする感覚……」

すぐに視線を戻す。

里見「え？ いや、やったの撮影だけだろ？」

彩夏「いいから、早く乗るよ！」

○バス内部（朝）

千咲「たのしー！ ほら愛梨ちゃん、見て！」

千咲と愛梨、隣の席に座っている。そ
の隣に、彩夏。

愛梨「う、うん」

千咲「もー！ はい、お菓子！」

千咲、ポテチの袋を取り出す。

早苗「お昼が食べられなくなるわよ、千咲」

里見「そうだぞ」

千咲「ちえー」

千咲、むくれる。

○旅館前

5人と前田香（30）、旅館の前に立っている。

千咲「やつほー！ うみー！」

彩夏「そんなに楽しみだったの？」

千咲「今まで友達できなかったから」

彩夏「そっか。楽しんでくれて、すっごく嬉しい。って、まだ始まってすらない？」

千咲「楽しいからいいの！」

香、彩夏のもとに歩く。

彩夏「千咲」

彩夏、千咲の頭をなでなでする。

千咲「ん」

千咲、頬を赤らめる。

その様子を少し遠くから見ると、早苗、里

見、愛梨。

早苗「彩夏、猛アタックしてるわね」

里見「そ、そうだな」

愛梨「うん……」

里見「早苗は彩夏のことなんとも思ってるねえのか？」

早苗「そういう意味では見てないわ。見てたとしても言わないでしょうけど。里見、それ聞いて何がしたいの？」

里見「え？」

早苗「里見、あなた……」

早苗、里見をじっと見つめる。